

12th Pacific Rim College of Psychiatrists (PRCP : 環太平洋精神医学会) Scientific Meeting および Mental Health Policy Workshop に参加して

和気 洋介¹⁾, 佐藤 創一郎²⁾, 橋本 直樹³⁾, 加藤 隆弘⁴⁾, 馬場 俊明⁵⁾,
内田 直樹⁶⁾, 澤田 健⁷⁾, 小泉 弥生⁸⁾, 中川 敦夫⁹⁾, 館農 勝¹⁰⁾, 上原 久美¹¹⁾
(日本若手精神科医の会 (JYPO))

街の店に月餅が所狭しと並び「中秋節」を迎えようとする台湾で、2006年10月4~5日に花蓮と高雄で精神医療政策のワークショップ(以下、WS)が、引き続いて5~8日の4日間は台北で第12回 Pacific Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting (以下、PRCP) が開催された。この学会は環太平洋地域のエキスパートが集う会として始まったが、現在ではアジア・オセアニアを中心として精神医療に関わる若手からエキスパートまで広い範囲の精神科医が集う学会となっている。今回、日本からも多くの若手精神科医が参加しアジア諸国の精神科医と議論・交流したので、日本若手精神科医の会(以下、JYPO)のメンバーから報告する。

1. 精神医療政策のWSに参加して

このWSは精神医療政策についてお互いの理解を深め、今後へ向けて討議するために開かれ、Harry Minas先生(メルボルン大学), Byron Good先生(ハーバード大学), Alex Cohen先生(ハーバード大学), 林克明先生(國家衛生研究院精神醫學與藥物濫用研究組主任), 蔡篤堅先生

(國立陽明大學教授, 台灣社會改造協會理事長), 秋山剛先生(NTT東日本関東病院)らがコメンテーターとして出席された。初日は花蓮(玉里)のYuli Veterans Hospitalにて、二日目は高雄にて開催され日本からは4名がWSに参加し3名の若手医師が口頭発表を行ったのでその一部を報告する。

International mental health policy (国際精神医療政策) WS1に参加して

筆者(佐藤)は所属する財団法人慈圭会慈圭病院の地域支援に対する関連機関・施設の利用状況などを紹介しつつ、精神保健福祉法と障害者自立支援法がどのように関わっているかを示し、当院の地域支援チームの機能について事例を用いて紹介した。次にYuli Veterans Hospitalの取り組みについて、副院長の林知遠先生より、台湾中から治療抵抗性あるいは難渋する症例の集まる2400床の大規模病院で、高度に構造化された地域生活型社会復帰プログラムへ取り組んでいるとの紹介があった。同院のスタッフも積極的に議論に参加し、今後の環太平洋地域の地域医療につい

著者所属：1) 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科精神神経病態学, 2) 慈圭会慈圭病院, 3) 北海道大学大学院医学研究科精神機能学講座精神医学精神科, 4) 九州大学大学院医学研究院精神病態医学分野, 5) 北海道大学大学院医学研究科公衆衛生学分野(現：東京武蔵野病院精神神経科), 6) 福岡大学医学部精神医学教室, 7) 高知大学医学部精神科神経科, 8) 東北大学医学部精神科, 9) 慶應義塾大学大学院医学研究科精神神経科学分野, 10) 砂川市立病院・精神神経科(現：札幌医科大学神経精神科), 11) 横浜市立大学精神医学教室

受理日：2007年9月1日

てコメントが寄せられた。(1993年卒 佐藤創一郎)

Dialog : Community mental health (地域精神医療) : Scholars in humanity vs. scientist に参加して

蔡先生の司会で Cohen 先生と林先生との間で心理社会的側面と生物学的側面の融合についての対話が行われた。それぞれの国の状況の違いはあれ、今後の精神医療が地域生活支援という要素を重視せざるを得ない方向にあることを改めて感じ、民間精神科病院に所属するものとして危機感を感じるとともに、海外の精神医療従事者との議論を通して日本の現状に基づいた将来的な展望を明確に持たなくてはならないという刺激を受けた。また、国際的に日本の臨床の現状は数値などのデータでしか認識されておらず、我々の取り組みを発信していくことの必要性を感じた。(佐藤)

International mental health policy WS 2 に参加して

二日目は WS 2 精神保健サービスのアウトカム評価と WS 3 東アジアにおける国際協力という 2 つの WS が開かれ、それぞれ 2 つの報告と全体討論が行われたので、筆者の参加した WS 2 について報告する。WS 2 は「アウトカムは文化・社会特異的に測定されなければならず、アジア各国でも精神保健プログラムについて十分測定がなされるべきである」という問題意識から企画された。最初に Cheng 先生 (国立研究所研究員) が臨床アウトカムを測定する方法に加えて QOL を用いた cost-utility 分析を詳しく紹介された。次に筆者が “The Shorter, the Better?” Measuring Outcomes of Shorter Hospital Stay という題名で、日本の精神医療の概要と、入院日数短縮を促進する政策 (経済的インセンティブ) を何種類か紹介した。また、その政策決定に先立って国内で入院日数について無作為化した介入研究が行われていないことを示し、海外での研究を参考に政策決定するための研究デザインを提示し、日本・台

湾における実行可能性を検討した。初めての国際学会であったが、両国のケーススタディーをしたと、日本若手精神科医の会への要望を得て今回の WS に参加することとなった。全体討論では、新福尚隆先生 (西南学院大学)、秋山剛先生 (NTT 東日本関東病院) やハーバード・メルボルの精神保健研究所の教授など精神保健の第一人者にコメントしていただき、大変貴重な体験であった。(2005年卒 馬場俊明)

International symposium of psychopharmacoeconomics に参加して

高雄で行われたこの会は Chong Mian Yoon 先生 (Chang Gung Memorial Hospital 教授) の主催で行われた。朝 8 時から夕方 6 時という長丁場で行われ、全体に 3 つのセッションに分かれており、筆者 (内田) は 1 つ目のセッションである Research on East Asia Psychotropic Prescription Pattern (以下、REAP) に参加した。この REAP は新福先生 (西南学院大学) と、Tan Chay Hoon 先生 (Singapore National University) が 1999 年に始めた研究で、東アジアにおける両先生のネットワークをもとに、抗精神病薬 (REAP-AP)、抗うつ薬 (REAP-AD) といった大規模処方調査を行っている。まず、REAP が始まったときから携わっている Sim Kang 先生 (Singapore) が REAP-AP について報告した。REAP-AP は 2001 年と 2003 年に東アジア 6 ヶ国で行われており、それぞれを比較する内容での報告であった。日本の多剤併用大量療法 (2001 年はクロルプロマジン換算で 1000 mg/day 近く、他の国の 2 倍近い) は、従来言われているとおりの結果であったが、2004 年ではそれが 2 割近く減少していたという結果は興味深いものであった。次に筆者が REAP-AD について話をした。1 時間にも及ぶ時間と、なにより慣れない英語での初めての海外発表で緊張したものの、何とか無事に終えることができた。JYPO でプレゼンテーションの仕方を研修したことはやはり大きかったように思う。本発表をお聞きになった若手が「あれく

らの英語で発表できるのなら自分でもできそうかな」と海外に目を向けられるきっかけに少しでもなれば幸いである。(2003年卒 内田直樹)

2. 第12回 Pacific Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting (PRCP) に参加して

第12回 PRCP では多くの若手精神科医がシンポジスト、座長として参加した。JYPO から6人がシンポジストとして、2人が座長として参加したので、その一部を報告する。

Symposium ; Mental health promotion from the view of the young psychiatrists に参加して

このシンポジウムは JYPO の佐藤創一郎先生(慈圭病院)と Jong-Ik Park 先生(Korea)が中心となって企画された。シンポジストは、筆者のほか、JYPO から加藤隆弘先生(九州大学)、Erin Wu 先生(Taiwan)、Jong-Ik Park 先生(Korea)が発表した。筆者は、地域に根を下ろした臨床研究が地域精神医療にもたらす正の効果について触れ、加藤隆弘先生は JYPO の会員を対象に行ったアンケートをもとに、精神医学の生物学的側面と心理学的側面の両立というきわめて興味深いテーマを、「悩」と「脳」というキーワードを基に漢字の成り立ちに関連付けて熱く語った。また Wu 先生は、4年前から関わってこられた台湾での精神医療プロモーションについて報告された。資金を集め、多面的に啓発活動を進めてきた話は、病院と研究室にこもった精神医療をまっぴらとする多くの医師に、新鮮な驚きを与えた。最後に Park 先生からは、韓国の抱える精神医療の問題点とその展望についての話があった。韓国の抱える多くの問題は、日本の問題と共通であり韓国の目指す精神医療改革の方向は我々にもきわめて示唆的な内容であった。日本、諸外国のエキスパートも姿を見せ活発な討論で、シンポジウムとしても完成度の高いものとなった。(2000年卒 橋本直樹)

Symposium ; Geriatric mental health system in eastern Asia に参加して

アジア諸国で高齢化社会が急速に進んでいる。このシンポジウムでは、認知症やうつ病、高齢者の自殺に関する早期発見、早期介入についての各国の取り組みを予防医学の見地から討論した。小泉(鶴々谷プロジェクト)と館農勝先生(中空知認知症を支える会)、Dong-Woo Lee 先生(Korea)、Ching-Kuan Wu 先生(Taiwan)、Wai Chi Chan 先生(Hong Kong)が各国の高齢者地域医療システムの紹介をした。共通して強調されていたのが連携の大切さであった。そして地域一般住民に対し疾患に関する知識の普及と啓発、ケアスタッフの教育、チーム内の情報交換が大事であることをどの演者も強調していた。高齢化社会を抱えるどの国も克服すべき課題は類似しており、国境を越えた情報交換も大切だと思われた。各国の状況を比較し確認できたという点で大いに勉強になったシンポジウムだった。(1999年卒 小泉弥生)

Poster session に参加して

ポスター会場は製薬会社のブースと共有のスペースでの展示となったが、たいへん興味深いものが多かった。約30演題の研究テーマは様々であったが、津波災害後の自殺予防活動など社会精神医学的内容が目立っていた。また卒後教育の発表もあり、各国の取り組みを知ることができた。東アジアでの抗うつ薬の処方調査(REAP研究)も興味深く、同じアジアでも国毎にかなり使用薬剤状況が違っており、欧米のうつ病治療ガイドライン利用の適否について考えさせられた。このように各ポスターを見ていると、日本で目にする欧米雑誌からは見えてこないアジア地域の特性などを窺い知ることができた。そして、改めてアジアの中の日本とその中での精神科医の役割などを考える機会となった。この PRCP を通じて更なる環太平洋地域間の交流を願っている。(1999年卒 中川敦夫)

Symposium; PRCP research award

Research Award の受賞講演は、日本 1 題、韓国 2 題、香港 1 題となっており、その国の精神医学研究の勢いと PRCP への意欲などを反映しているように感じた。講演は、直前までランチョンセミナーがあったことから、あまり人が集まらない中で、4 演題の中の最初の私の発表が始まった。内容は統合失調症の死後脳研究で、目標とする分子は前シナプスタンパクであるコンプレキシンであり、その変化が認知機能障害と関係するというものであった。生物学的研究を行っている人の参加が少ないため、注目は少ないようであった。2 人目の Hwang 先生 (Korea) の発表は、The American Journal of Psychiatry に発表されたばかりの内容であり、かつ今私が行っている大脳基底核の MRI 研究であったため、個人的に注目していたものであったのだが、実際になかなか面白い内容であった。個人的に一番印象深かったのは Chan 先生 (Hong Kong) の発表であった。彼女はスピーチの冒頭に「先の 2 題の科学的な研究とは異なる香りのする研究をお見せします」と言った後、2003 年 SARS 後に女性の高齢者の自殺が増加したという研究結果を紹介し、発表内容の豊かさと発表技術には感服させられた。4 題目が

Hong 先生 (Korea) の発表で、高齢者の認知機能障害と代謝症候群の関係を示したものであった。1000 人に近い高齢者からの医療情報、遺伝子解析などのデータの収集の苦労を想像させられた。終わりに近づくにつれて、聴衆も増え、盛況なシンポジウムを楽しむことができた。(1994 年卒 澤田 健)

今回は若手のわれわれにとって非常に実りある学会となった。環太平洋精神医学会は次回、2008 年に東京で開催される予定であり、地域の精神医療の理解を深め合うとともに更なる若手の交流を期待して止まない。

謝 辞

JYPO (日本若手精神科医の会) は若手が主体となり国際的に通用する精神科医の育成と、国内外の精神科医との交流を目的とし、世界精神医学会と日本精神神経学会の協力のもと、2002 年 6 月に設立された団体です。現在では約 90 名の会員で活動をしています。本学会でも活動報告の機会をいただき、その活動内容に多くの先生方からご賛同と応援のお言葉をいただき、まことにありがとうございました。そして、様々な場面でご支援いただいている先生方に、この場をお借りし心より御礼申し上げますとともに今後ともご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。(2000 年卒 上原久美)